諸外国のデザイン事情

ガラパゴスデザイナー中国に渡る Ⅲ
—— 中国8000キロの旅

株式会社賀風デザイン 代表　古賀治風

前号までのあらすじ

中国進出から3年、数々の苦難を経て中国の商慣習に対抗できる独自の開発プロセスを確立、以降中国企業とビジネス上のトラブルは解消されることとなった。同じ頃、経産省の冊子に取り上げられこともあって、中国進出を計る様々な人々がオフィスを訪れるようになってきた。こうした状況変化の中、中国をさらに深く知りたいと思い始めた矢先、日系企業大手から中国や中国人についての調査依頼がやってきた。

企画やデザインでの調査は毎度のことだが、今回の依頼は変わっていた。「当社に関係する内容が入っていれば方法は一任する、中国を広く見てきて欲しい。そこから感じたこと わかったことを賀風さんの感覚で語って欲しい」と言う。まことに大らかな依頼だ。予算は目を見張るほどではないが、小さくも無い。バブル崩壊以降せちがらくなった日本では、まずありえない仕事だ。中国がそれほど重要な市場だということなのだろう。とにかくこれはただの観光ではない。予算に見合い、かつ並みの情報では得られない価値でクライアントの期待に応えなくてはいけない。

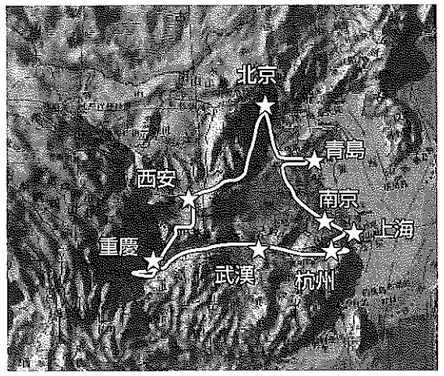
いつもそうだが 一見、大雑把で楽そうな依頼というものは、こうして自己責任を増殖させ、手間がかかるようにできているのだ……。

1．中国8000キロの旅

まず我々は二つのチームを組んで中国国内の主要都市をまわることにした。一つのチームは自分とマネージャーの観察行動、もう一つのチームは依頼企業が期待するような定点観測を各都市で行うことにした。

上海から北上し南京 青島 北京へ、そこから内陸に向かい西安へ、その後 南へ下り重慶を訪ね、東に折れて武漢を経て杭州から上海へ戻るというものだ。全行程、ほぼ8000キロ、約20日ほどの観察旅行だ。これでも東北地方や隣のモンゴル自治区、西に奥まったチベット自治区 そして改革開放発祥の地である南の方面は抜かしてある。中国はとにかく広い。残念だがスケジュール上これが目一杯、まあこれだけ回れば何かを得ることができるだろう。

中国人の感性とは一体どこからやってくるのかを風土から感じ取ることができる最高の機会だ。それに加え、政治教育歴史言語などもあわせて学習することとした。この1回で 中国を全て知ってやろうという貪欲な内容だ。



中国8000キロを巡る

2．出発点の上海から

●その1、事前通告

この頃、上海は万博開催を前にして工事ラッシュだった。我々の入っているビルは歩いて5分ほどで黄浦河沿いの外灘(バンド)に出られるとても便利なところ。この黄浦河をはさむ両岸で万博が開催される。だからこのあたりは至る所工事中。その上、このビルは上海一番の繁華街南京路に面して最も交通の多い場所だ。目の前の交差点も大工事が続いている。

万博前の上海

不思議だったのは この工事が完成すると一体どういう状態になるかを誰に聞いてもはっきりしないことだ。立体交差になるという人、クルマは地下に通してすべて歩行者専用道になるのだという人、通路を挟んだ反対側の家はすべて取り壊されて公園になるという人、いやバスターミナルになるという人誰に聞いても本当のことはわからない。

日本ならば完成予想図などで周辺への情報提供は普通のことだがここの常識は違う。

この国では住民に対し事前の情報提供サービスを積極的に行わない。あるいは全く行わない。また住民たちもそういった情報不足にイラついたりしない。

事前通告がないというので困るのが来年のカレンダー。国からの発表はいつも年末ギリギリ。これでは会社の予定も組めない。最初は信じられないので社員に「これじゃみんな困るでしょ」というも「別に・・」という感じ。

確かに目の前の道路がどうなろうとそれから考えればいいし来年は何が起こるか分からない。その都度対処するのが中国流ということなのだろう。

しかし事前通告のことで最も困ったのは不動産の賃貸契約。契約条項に「貸し手側」の都合で一方的に「借り手側」に退去を通告できるという条項が必ず入っている。実は我々も一年後にこの通告を突然受けることになる。まだ契約期間が残っている上にたった2週間後に退去という期限付きだった。香港資本にビルごと売却するということだった。何も問題を起こさずともこういうことが起こる。これには当然保証金が支払われるのだがこれもすったもんだの挙句に決まっていく。金額は各店子との交渉できまるのでお宅は幾らだったのか、どこかいいとこ見つかったかという話でそのあいだはとても仕事にならなかった。

中国におけるマンション投機とかのブームは日本でもよく聞く話題だが これには我が家を手に入れ何とか生活の場を安定的に確保したいという切羽詰った心理もあるのだと自分は思う。

いくら刹那的な中国人でも明日住いを追い出されては困るだろう。

●その2、会議から

このビルの4階フロア全体がデザインインキュベーションという特区になっていた。ここは上海市共産党科学委員会の管轄下にあってその関係者の定例会がよく行われる。自分も出席メンバーの一人で発言も求められる。会議の内容はお定まりの「成果達成報告会」だから特に目新しい話もない。しかしこの会議の様子は日本人には信じ難いものがある。一言で言えば時間の経過とともにどんどん人がいなくなっていく。

居並ぶ高官の方々は担当部分の発言が済んだら次々と帰ってしまう。その関係者も帰っていく。どんどん人は少なくなっていく。そして終わる頃にはほとんど人は残っていない。閉会の挨拶もなく消えるように終わる。間の抜けたというか、意味がないというか、こういう会議が共産党も含めた下部組織の実態だ。

共産党員といっても政府のお役人も含めて例外なく自分のビジネスを持っているから形だけの出席や発言の義務よりそちらを優先するのは当たり前なのだろう。

仕事、仕事、とにかく上海人はビジネス最優先。

●旅をスタート、先ず列車の話題

しっかり じっくりと見ていくのだからと、あえて列車と航空機を半々の旅になった。新幹線はまだ無いので急行寝台だ。客席には軟座と硬座という呼称があり、前者は上下２段、後者は上下３段だ。現地を深く知るには庶民的に行こうと旅の途中であえて硬座を経験してみた。 マネージャーは止めたほうがいいといったのだが、この理由が乗りこんでみてわかった。広軌鉄道だから日本に比べて列車内は広いのだが上下３段ではとても寝台と言えない。荷物棚と呼ぶのがふさわしいほど幅も高さも異様に窮屈だ。人が寝れば荷物を置くことはできない。

その上、列車内はトイレの中まで人があふれ、子供が床に直接用をたしてしまう。また、急行とは名ばかりでスピードは上がらず、途中途中で30分ほども停車する。中国を列車で移動するならば倍の日程を覚悟すべきだ。この旅でもっとも辛かったのはこの列車の移動だった。多くの中国人がこのような移動環境で広大な中国大陸を往還してきたのだ。

彼らにとって新幹線の登場が如何に衝撃的な出来事であったのか、この経験からよくわかるのだ。

ちなみに現在の新幹線も寝台列車があるのだがさすがに３段ベッドの設定は無い。

３．最初の訪問地、南京

超コンパクトな３段ベッド

南京は地図で見れば上海のお隣くらいに近い。あっという間に到着といいたいが通常の列車で数時間、東京 大阪くらい時間がかかる。これが中国の距離感。

一般の日本人が知る南京という地名が実は中国史上とても重要なところであることを我々はあまり知らない。ここは歴史的に数百年さかのぼれば、かって呉や宋の歴代王朝の都として栄えた中国の四大古都であり14世紀から15世紀にかけては世界最大の都市だった。そして宋の時代には様々な技能を持った人々がたくさん渡日して帰化人となり日本の技術向上や文明化に寄与したという。この片鱗でも見てみようと歴史記念館や古いお寺など巡ったりして過ごす。しかし正直いえば事前の知識不足で観光客の興味範囲を越えない。

街に出てみる。ここも建築ラッシュで至るところが工事中、想像していたよりも賑やかな大都会。しかしこの都市にあるものはほとんど上海で事足りるといった感じ。

ほんの半日ほどのあわただしい滞在で南京中央駅から次の目的地、青島へ向かう夜行列車に乗り込んだ。

●列車の中で

列車が南京を出てまもなく同じコンパートメント(このときは軟座)に乗り合わせた夫婦の旦那さんが南京軍区で勤め上げた退役軍人だということがわかった。これからお二人で青島にある軍専用の保養所に遊びに行くのだという。

これはいいタイミングだ。自分はかねてから聞きたかったことを彼らにぶつけてみることにした。100年以上前の阿片戦争のことだ。日本がいつも悪者にされているのになぜこのことは問題視されないのか不思議だったのだ。「あれほど中国人の尊厳を傷つけた悔しい時代は無かったのではないか？原告ともいうべきＥ国に対し厳しい言動を聞いたことが無いのはなぜか」。これはかなりキツイ質問であり、しかも相手は元軍人、そして質問する自分は日本人で、列車はさっき南京を出発したばかりだ。シリアスになる条件は全てそろっている。それでもあえて聞いてみた。しかし返ってきた言葉はいたってさわやかなものだった。一言で言えば「あれは経済問題であり貿易上のトラブルがこじれただけのことだからいつまでも問題にするほどのことでも無いだろう」という内容だった。

確かに阿片は当時 貿易の対価としてインドを経由して薬として持ち込まれ、結果、野放図に中国全土に広まっていき、それを良しとしない中国人の某さんが戦争のきっかけとなり、それに対抗する英国艦隊がやってきて・・・・、という一応の知識は持っている。

確かにこの経緯をそういう見方で見ればそうと言えなくも無い。が、しかしこの答えではどうも納得には至らない。しかし、これ以上御夫婦の旅を邪魔してはいけない。言葉を収め、話題は他へ移すことにした。

おそらく この旦那さんの「アヘン戦争はビジネス上のトラブルが昂じただけの結果」という言葉は多くの中国人の見解ともなっているのだろう。

中国の人たちは「自身の利害に直接関わらない物事」は、このように感情とか感覚とかを持ち込まず割り切って考える傾向が確かにある。中国人の考え方を理解する一つのキーワードだ。

４．青島

風光明媚な海沿いの街。ここには家電で有名なハイアールの本社がある。冷蔵庫生産で世界NO. 1メーカーの本拠地にふさわしく広大な自動車道にはハイアール道路という名称がついていた。

ここでは以前上海で連絡を受けた回転ドアメーカーを訪問した。

中国人は見かけを何より大切にする。だからビルの玄関は豪華がいい。それを演出するのに回転ドアは必需品だ。中国人はこういう仕掛けモノが大好きだ。

この会社は回転ドアのみを扱う大メーカーだ。回転ドアなら何でもある。最も巨大なものは直径が５～６メートルほどもあり内部にはガラスで仕切った展示エリアが付属し一緒に回転する。ここに花や自社製品を飾る。

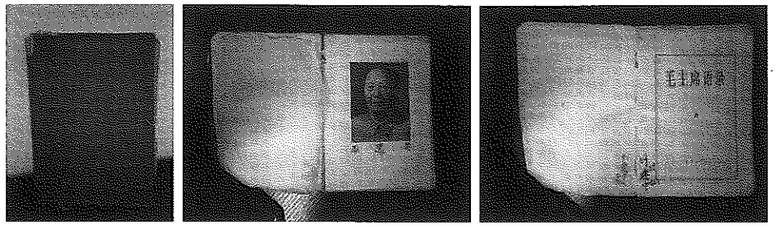
ところで中国にはインフラやモノ作りの一部分だけを大量にかつ多品種作ることで成り立っている産業がたくさんある。この回転ドアメーカーもそうだが 他に玄関ドアだけを作っているところやドアハンドルや椅子の肘掛だけを作っている専門メーカーなどが無数にある。こう聞くと日本の系列サプライヤーや子会社のようだがそうではない。これらのどれもが規模のある独立企業(規模メリットがある)であり、ここから条件が見合えば誰であろうと極めて簡便に買い求めることができる。こうしたサプライヤーがモノつくり産業の中に一団を形成し、それを利用して次々と組み立て型産業が生まれていくという構図だ。当然、中には「自助努力を省いた褒められないモノ作り」も少なくないのだがこういう相互関係が中国のダイナミズムを作り上げていることは間違いない。正直に言えば今や日系メーカーもこういう産業構造の恩恵を受けているのが実情なのだ。

５．北京

●感じたこと。その１

北京ではまもなく行われるオリンピック目指してインフラ整備の真っ最中だった。北京は何といっても歴代王朝の都であり数知れない歴史の大舞台でもある。その中でも中心となるのは、かって皇帝の居城であった紫禁城だがここも何やら改修工事であわただしい。ここで妙な光景をみることとなった。それは広場一面を埋め尽くしている古い床石を全て真っさらなものに張り替えていたことだ。中国人は古いものは何でもみすぼらしく恥ずかしいのだと聞いてはいたがこれがそうなのだろうか。ここを訪れた人々は角の削れてしまった古い床石から、かってこの上を幾度も通り過ぎたであろう歴代の皇帝やそこに付き従う従者をイメージし、そして歴史上の物語に思いを馳せるのだ。掘り起こされた古い床材が目の前に無造作に積み上げられピカピカの石材に隙間無く張り替えられていく。もう少しましな修復の方法もあるだろうにと思いながら何とも乱暴な工事風景を見ることとなった。

＊中国の政治：
共産党の一党独裁ではない。他に７つの政党もあり中にはあの国民党もある。すなわち多党派制。しかし全ての国家運営は共産党による指導のもと行われる。



道端で売られていた毛沢東語録

●感じたこと。その2

歴史的に見ればほんの少し前のことだが中国全土の若者が狂ったようにこの北京をめざした事がある。文化大革命のときだ。マネージャーのKさんもまだ幼かったが毛沢東に一目会いたいと小さな紅衛兵(紅小鬼)として北京へ行ったのだという。列車は無料だったそうだ。

この頃の若者が手にしていた毛沢東語録がホテル近くの道端で売られていた。表紙の裏打ちが当時の古紙で代用されていたり、実際に書き込みなどもあるので本物だろう。

これを手に高くかざし中国全体が狂信化した時代が現実にあったのだ。

この旅の時点から遡ってたかだか30年ほど前の出来事である。

この時期に加害者と被害者になった人が今でも同じ生活圏の中で共に暮らしていることもあるのだろうかとKさんに聞くと「幾らでも」という答えだった。

＊現在、中国産業界の担い手になるはずの中堅技術者層がごっそりと抜け落ちているのもこの文革の弊害だ。当時大学教育そのものが知識階級として否定され、大半の若者が高等教育を望む状況になかった。

6．西安

西安は秦や隋、唐の時代には長安と呼ばれた王朝の都だ。ここは秦の始皇帝の兵馬桶でも有名だが自分は真っ先に青龍寺という仏教寺に向かった。かの空海が小乗仏教、すなわち密教を学んだ寺として司馬遼太郎の『空海の風景』に描かれており司馬さんのファンとして是非一度訪ねてみたかったのだ。しかし残念ながら当時の面影は残っておらず、近年、かろうじて廃寺になるような状態を日本からの援助で食い止めたとのことだった。

ところで唐の時代には皇帝の下に多くの有能な異国人が働いていたという。かの空海がわずかの滞在期間で居並ぶ高弟をさしおいて阿闍梨という最高位のライセンスを受け様々な仏具と共に帰国したことに自分はとても興味があった。出自に関わらず有能な者を登用するという中国の人事感覚はここまでの自分の短い経験でも確かに感じ始めていたところだ。中国人はまことに現実的な考えの持ち主であり役に立ちさえすればどこの何者かは問わないようなところが確かにある。空海さんには到底及ばないが是非 上海賀風デザインも役立ててもらえればありがたい。

＊中国と宗教：
中国では宗教は認めてはいるが公の場における布教活動は禁止している。共産主義とは人民の生き方を指導する強力なイデオロギー体制だ。そのことが宗教と相反するのだろう。文革時には多くの宗教施設が破壊されたという。

青龍寺

●友人と再会

以前 デザイン学会の講演などで何度も出会った西安交通大学のR教授に再会、地元料理を頂くことになった。指定された料理店に行くと先生は既に学生数名と共に待たれていた。皆が着席して先生から「今夜日本人のデザイナーと会うのだと言ったら学生たちが皆行きたいと騒いで大変だった」という話があった。西安では日本人の観光客は見かけるが現役の日本人デザイナーはまだ珍しいのだろう。

ここ西安はシルクロードの基点でもあり料理は当然西方の料理で上海とはだいぶ違う。食事は変わったマナーで始まった。先ず全員、よく手を洗うこと。そしてオーダーの前に硬いパン（のようなもの）が各自の前にひとつづつ配られる。パンはいきなり食べるのではなく、ひたすら千切り、椀の中へためていく。初めてなので どのくらいのサイズに千切るのかがわからない。学生たちにこのくらいと教えられ必至に作業に励む。椀の中に十分たまったら それを店員が回収していく。これについて先生の説明。「今ではこんな食べ方をする人はあまりいないのだけど今夜は日本の友人のためにあえてやってもらうことにした」と言う。このあたりは以前とても貧しかったのでスープに千切ったパンを入れて主食にしていた。こうして食べると腹持ちがして一日２食でも大丈夫だったのだそうだ。

R教授は自分より10歳年長だ。あの文革前後、飢餓の時代を生き抜いた世代だ。この他にも厳しい生活を沢山経験されているのだろう。この話を横にいる学生も真剣な表情で聞いている。やがて、あの千切ったパンの入ったスープが運ばれてきた。これがなかなかおいしい。

ひたすら千切った成果

千切ったパンに羊のダシが絡まり濃厚な味わいだ。もっと味の無いものかと思ったら大違い。貧しい時代の料理とはとても思えない。

他にも羊の肉や地元の新鮮な野菜などが次々と出てくる。当然 強い酒の乾杯は既に始まっている。はるか異国の地でこんな暖かい歓迎をしてもらっている感慨がジワリとしみわたる。

西安の工業デザイン発展に是非力を貸して欲しいという話には「勿論！」とうなづくばかり。

円卓は盛り上がり、もはや難しい話をするきっかけはつかめそうも無い。ただ酔うに任せるのが礼儀というものだろう。

7．重慶

西安から重慶までは直線距離で600キロ しかしこのあたりは地形が複雑で迂回しながら列車は進む。結局 倍近い1000キロ以上にもなった。旅は全く予定どおりに進まない。

内陸部最大の重工業都市 重慶は長江上流に位置し 中国政府の４つの直轄市の一つだ。長江上流といっても川幅は広く岸辺からいきなり山がそそり立ち、その急峻な土地にマンションがへばりつくように立ち並んでいる風景が特徴的だ。将来 この内陸都市でも工業デザインの需要が必ずあるだろうと考えて行動したのだが上海を急坂に並べたような街並みには少しげんなりするところがある。本来ならば自然豊かな地域と思えるのだが所詮インダストリーとネイチャーは相容れないものなのだろう。そういえばここまで見てきた各都市の風景は何かミニ上海を追いかけているようで特色は急激に薄れていくように推察された。

＊中国の直轄市：
北京、天津、上海、重慶の４都市。省と同格の扱い。

●重慶から少し寄り道

重慶から更に内陸に入った内江というところにある歯科機器メーカーを訪ねた。ここは中国人でもあ

まり知らない街だ。このメーカーとは上海の歯科機器の展示会で出会い、その後、幾度か来て欲しいと連絡をもらっていた。それで「ついでに」と寄ったのだがとてもそんな距離ではなかった。地図上の距離感覚にはいつまでも慣れそうにない。

日本での歯科機器における我々のデザイン開発経験は相当に高いと自負している。それを中国でも是非展開したい。それもあってこうしてやってきたのだ。しかし残念ながらこの元国営企業ははるばるやって来たかいもなくすさまじく古かった。

歩いて回るのがつらいほど規模は大きい。工場見学の説明が創業100年という言葉から始まったとうりすべてが古いレンガ造りにトタン屋根。その上、昔の企業だから社内には鋳物やメッキの工場まで備えている。いまどき考えられない非効率な組織だ。

できあった部品はすべて土間に置き散らかされ窓ガラスはところどころ割れている。そして本社屋に戻れば設計 生産 経理まで社長とわずかの社員で切り盛りしている。是非 素晴らしいデザインで製品の価値をあげたいと社長は言う。しかしこの工場を見てしまうと簡単にうなづくわけには行かない。

早々に切り上げて帰ろうとするが既に陽も傾き夕食に誘われる。食事の席でわかったことだが今日、我々が訪ねてくるということで工場をすべて稼動させたという。(すなわち普段は稼動していない？)とにかくずいぶんと追い込まれている様子だった。もっと早くいろいろと手を打てればよかったのだろうが……。

古い工場

●余談

ここで初めて本場の激辛火鍋に出会った。しかし今回は味覚の旅では無いので印象は割愛すべきだろう。しかしそれでも語っておきたいと思う。

辛いものが苦手ではない自分だが その辛さは「食べ物の範疇に入れることが難しかった」。

8．杭州

杭州では中国美術学院を訪ねた。上海デザインビエンナーレで知り合ったT先生が是非立ち寄って欲しいとのことだった。観光で有名な西湖の岸辺にそびえるように建てられた学舎は玄関からして訪問者を圧倒する立派な建物だった。

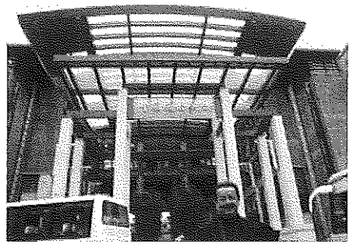
これまた立派な応接に通されてT先生と再会、同僚の方も数名同席されている。T先生は日本への留学経験もあって片言の日本語も話される。この方も文革の影響で下放(地方での労働体験)を余儀なくされ大学進学を中断させられた方だが その後 再入学し無事卒業、この美術学院の発展に貢献されることとなる。ちなみに現在著名な大学のデザイン教育界で活躍されている先生方の大半は海外留学の経験者であり かつ 文革の余波を受けながらも学問をあきらめなかったという経歴を持っている。

T先生との御挨拶もそこそこに校舎内を案内していただく。

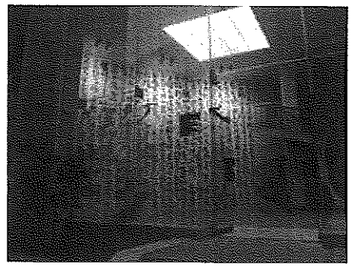
最初に案内されたのが書の会館だ。見上げるほどに高い室内高をいっぱいに使い「書」が飾られている。本来、古典である書の展示がモダンな展示スタイルと絶妙にマッチしている。

ここで触れておかねばならないが中国人は見せること、すなわちデザインは超が付くほど大好きだ。良い製品作りともなるといろいろと問題は発生するが こと、見た目を良くする、すなわちデザインに込める情熱は日本人よりも正直いって、はるかに高いようだと感じ始めていたところだ。(・・・中国へやってきた甲斐があるかもしれない・・)。

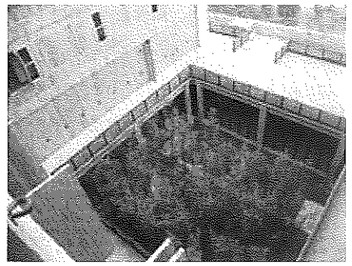
さて学校参観は続く。書の会館を入って正面には前中国主席である江沢民さんの書が展示されている。この学校の土地を取得するにあたって特に便宜



中国美術学院 正門



書の会館



工業デザインの学舎

を図っていただいたとのこと。

そういえばここに至るまで江沢民さんの書を各地で見かけてきた。書のお好きな方とお見受けする。

その後 工芸や工業デザイン棟を見学するが広さ、内装、設備共に最上級だ。壁材に木をふんだんに使い中庭には竹林、広大な敷地をフルに使った魅力的建物は既にこの国がデザイン大国のような気持ちにさえさせる。

＊中国のデザイン教育：
中国にはデザイン教育を行っている高等教育機関は全国に900校もある。中国で最初にデザイン教育を取り入れたのは湖南大学で1979年、有名な北京の精華大学は1984年、上海の同済大学1986年、中国美術学院1994年、デザイン科が創設されている。

＊中国の教育体制について：
小学校６年、中学３年、高校３年、大学４年。すなわち日本と同じ。しかし人口の状況において中学校が４年制になる場合もある。

＊文字：
当然、全て漢字表記。カタカナやひらがなは一切無い。ただし100年ほど前、漢字を簡略化（簡体字）する運動があったが中途半端なところで終わっている。幼稚園で学ぶ漢字が300文字！

9．最終日

さてこうして20日間8000キロに及ぶ大旅行は無事終了。同行した定点観測チームもなかなかいい資料を残すことができた。これで顧客プレゼンは充分クリヤーできるだろう。

実は途中飛行機に乗り遅れたり、メンバーとはぐれたり、予約したホテルが汚すぎてキャンセルしたりで、いろいろトラブルらしきものがあったのだが大きな事故が無かったのは何よりだ。

明日は上海へ帰るという最終日、マネージャーのKさんと二人で今回の旅を魚に一杯酌み交わすことにした。(実は毎晩飲んでいるのだが・・・)

彼は東北の生まれで朝鮮族出身、日本留学歴７年で日本語はもちろん堪能だ。今回一緒に回ってみてどうだったかを聞くと「中国はまだ汚いでしょ」と自嘲気味にいう。自慢にもならないが自分は汚いとか古いとか言うことにあまり気になるほうではない。むしろ幼い頃 鼻をたらしながら遊びまわった頃への郷愁が強い。このこともあって古い横丁の残っている中国の街が嫌いじゃない。残念ながら上海は古い租界時代の建物をどんどん壊してマンションを雨後の竹の子のように立ち並べていく。会社の前にあった租界時代に建った３階建ての木造家屋は味わいがあって すごく気に入っていたのだが今ではしゃれたデパートになってしまった。

Kさんは「日本はきれいですよね」と続ける。そのきれいな日本にずっといる気はなかったのかと聞くと本音が出た。「でも日本人は少しうるさいですね、疲れるくらい」という。すなわち礼儀作法のことだ。バイト先などでだいぶうるさく言われてきたらしい。その点 中国はホッとするものがある、だから帰りたくなったのだという。

今回の旅の話からはそれるが、この話はすごくよくわかるのだ。

自分のパスポートはその頃既に入出国スタンプで一杯になっていた。それほど頻繁に日中を行き来してきたことになる。最初の頃は傍若無人な中国人の振る舞いに嫌悪感を抱いたものだが、この頃こういう「いい加減」も悪くないと思い始めていたのだ。確かに中国人はきちんと仕事をやり遂げようとするとかなり難しい人たちだがこと日常生活となると、

この「いい加減」がうまく作用する。中国人の方が人間(という生き物)の本質に近いのかもしれないと思うようになってきたのだ。確かに日本人は気配り気遣いに優れていてそれがいいチームワークを生み、いい製品開発につながっていくことはわかっている。 これこそが世界に誇る日本の美徳ではあろう。しかし最近の日本はこのきめ細かい精神状態を「どうでもいいこと」にまで持ち込む組織人がやたら目に付くようになった。コンプライ・・・何とかというのもその一因かもしれないし コストや効率化の御旗を振り回せば怖いものなしという風潮もそうかもしれない。

賢い人がシステムやマニュアルで周辺をきれいするとき人間という生き物のいい加減さも外へ掃きだしてしまうのだろうか。

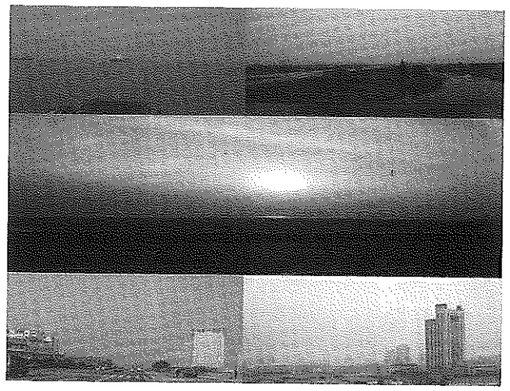
デザインなどまさに「いい加減」が命だと思うのだが・・・。

昔はよかったなあとつい口に出したくなるのだ。さてこれも歳のせいだろうか。

気づけばKさん、グラス片手にうつらうつらとしている。さすがに旅の疲れが出たのだろう。さあ旅もこれでおしまい。明日は上海だ。

10. 中国8000キロを回って気づいたこと…… 辛くなるほど真平らで広い風景

一番記憶に残ったのは 何といってもこの国の広さだろう。我々が巡ったのは俗に言う華中平原の周辺であったのだが一辺を関東平野と比較するとその広大さは一目瞭然だ。関東平野の海から秩父の山までの距離は凡そ50キロ、日本で一番広い平野でもこれくらい。華中平原のそれは1000キロほどもある。上海周辺だけで関東平野に匹敵するのだ。行けども行けども360度見回す限り真平ら。列車はおろか空の上を飛んでも見渡す限り黄色く霞む大地が広がっているだけというのは日本人の自分には辛く寂しいことを通り越して悲しい風景に見えてしまう。日本ならばどこに行こうが必ず山が見える。そのおかげで「あそこまで」という限界がいつでも推し量れる。自分が今どこにいるのかがわかる。しかし この広



中国でいつも出会う風景 見渡す限り真平ら。

大な中国ではそうはいかない。

ましてや飛行機も列車も無い時代に人々は歩いてこの大陸を移動していたのだ。考えるだけで気が遠くなる。これが砂漠ならばむしろあきらめもつくだろう。しかし華中平野は元来肥沃な土地であり数千年前から人が食べるには不自由の無い大地ではあったという。見渡す限り何も無い単調な風景の中に農作業をする人間とわずかの動物だけが動いて見えていたということだろうか・・・・。人の住むすぐ近くに 森、山、湖、川、があり、そして四季が巡り花が咲くということがどういうことなのか日本人に生まれたことをあらためて考えてしまうのだ。

和辻哲郎さんの書かれた有名な『風土』という本には風土こそが人を作る源だと書かれている。この取りとめの無い大地という風土の上で何千年も暮らすということが人の心にどう作用するのか。これは中国人を考える重要なキーワードの一つになるはずだ。

もっと想像力を働かせる価値はあるだろう。

11. 中国8000キロを回って考えたこと…… 波乱万丈の近代史

南京 北京 そして上海 重慶 いたるところで波乱万丈の近代史が深く刻まれている。

少し遠くから辿れば、300年間続いた清の時代は女真族(満州族) というたった60万人の少数民族が当時でも数億はいたとされる漢族中心の中国を支配していた。自らより数百倍多い異民族を統治すること、そして自らより数百倍少ない異民族に統治されるとはどういうことか想像に難くない。アヘン戦争、太平天国の乱に続く清国滅亡の後も平和はやってこない。

日清戦争、日露戦争、第1次世界大戦、日中戦争、国共内戦、朝鮮戦争、文化大革命、隣国との紛争、たった100年の間に中国の地を舞台にしてこれらの大きな争乱が立て続けに起こったのだ。不信と不安の中で互いを苛み深刻な飢餓もあった。それらが一応収束したのがつい30数年ほど前と聞けばこの国への見方も変わってくるのでは無いだろうか。

自分は当然 当事者ではないから本当のことはわからない。

しかし平和な時代に生まれたこんな自分の平凡な人生であっても面倒で、苦しくて、悲しいことが山ほども起こるのだ。この中国の近代史がこの国の人々の生き方に今でも影響を強く与えていると考えても間違いには当たらないだろう。

12. 旅のまとめに。

この旅は人から見ればまるで観光ツアーのようだが事前に学んでおいた中国史や国家体制と政治、言語 教育などを心の中で照らし合わせながらのまじめな体感旅行だった。

座学や車窓からだけではわからないリアルな体験はとても貴重だ。こういう仕事を与えてくれたお客様にとにかく感謝しなければいけない。

ところで、たかがデザインを作るだけのことでこんなに広範に考える必要があるかと問われれば答えは簡単ではないけれど、デザインとはそれを作りだすのも また、感じ取るのも人間の心であり その心がどこからやってくるのかに興味を抱き、理解を深めるのは大切なことだろうと思う。それにしても近くて遠いとはよく言ったものだ。歴史を振り返れば何と、今始まっている日中関係は、平和な時代としてはあの遣唐使の時代から700年も経てやっと訪れた2回目のまともな国交なのだ。だからこそ日本はこの巨大な隣国とこれから真摯に付き合っていかなくてはならないのだろう。

確かにこの国には自国にも他国への対応にも混乱が見られる。そして人々の生き方にも我々にとって理解しがたい行動が多いのも事実だ。

自分もこのことで随分と嫌なことにも出会ってしまった。それをクリヤーしようとがんばった挙句、今は様々な理由で近代化に遅れてやってきたこの国を理解しようとしている自分がいる。ここに来る直前まで何の興味も関係も無かった国とわずか3年でここまで来てしまったのだ。

おかしなことに こうしてこの国を知り始めると今度は日本という国を「ところでウチは大丈夫か？」と振り返ってみる自分が現れてきたことがまた 面白い。「来年は60歳 還暦」という頃だった。

次回予告

中国におけるデザイン開発

・刹那に生きる中国人は基本的に開発に不向きかもしれないという仮説。

・我々を信じ共に歩んでくれた中国メーカーもいたという事実。

(つづく)

●株式会社賀風デザイン

1981年創業。総勢10名の中堅工業デザイン会社。バブル崩壊以降、日本の産業界縮小の影響を考え今後の発展が見込まれる中国上海に2003年進出。数々の困難を乗り越え独自のビジネス手法を確立。現在、現地企業はもとより日系メーカーとも多くのプロジェクトが進行中。